

# 私の東南アジアへの目覚め

— 2つの短期研修における現地・現物・現実—

## The Awakening of My Interest in Southeast Asia:

## Three Actuals in Two Short-term Programs

名古屋大学経済学部経営学科3年 山田 雄輝

YAMADA Yuki

(Junior, Department of Business Management, School of Economics, Nagoya University)

キーワード：ASEAN、日系企業、海外留学

### 1. 私の交換留学までの歩み

私は2016年8月からタイ王国のチュラロンコン大学へ交換留学生として派遣される予定である。その目的は、「日系企業とタイの関係」について学習を深めるために、これまで学習してきた日本のビジネスシステムの知識をもとに、タイ流のビジネスモデルを学ぶことである。この目的を意識し、チュラロンコン大学への交換留学を志すに至るまで、私は2つの短期研修プログラムを経験した。一つは名古屋大学国際教育交流センターで実施されている短期研修プログラム、もう一方が名古屋大学経済学部によって提供されているCampus ASEANプログラムである。本稿では、これら2つの短期プログラムが私の交換留学の決断にどのような意味を持ったのかを述べたい。特に、私が2つのプログラムで経験したことからどんな刺激を感じ、どのような問題意識を持ったのかを中心に触れたい。そして本稿が日本の留学プログラムの充実、そして海外留学という手段を通して世界へ挑戦する日本人学生の増加に少しでも尽力できれば幸いである。

### 2. 短期研修プログラム「タイにおける日系企業のグローバル展開学習」

#### 2.1 概要

本プログラムは2015年2月11日から2月24日の14日間のプログラムで、名古屋大学と協定を持つチュラロンコン大学・カセサート大学が連携して実施したプログラムである。現地での講義やフィールドワークを通じ日本と深い関係を持つタイの文化や歴史を学ぶことに加え、日系企業への訪問を

通してグローバルなビジネスの展開を学ぶことを目的としていた。

ベトナムとマレーシア2カ国の旅行を通して東南アジアという地域に興味を持っていた私は、語学の要件が比較的易しく、費用が多額でないこともあり参加を決意した。しかしこのプログラムが、私がタイでビジネスを展開する日系企業に興味を持ち、交換留学を決意する契機になるとは予想もしていなかった。特に刺激的であったのが、JETRO バンコクオフィスの訪問と日系企業の工場見学である。経済学部学生である私にとって、海外の地で日系企業を訪問することは非常に貴重で有意義な機会になるだろうと大きな期待感を持っていた。

## 2.2 JETRO バンコクオフィス訪問

プログラムの一環として、日本貿易振興機構（JETRO）のバンコクオフィスを訪問した。ここでは、日系企業の海外展開を支援するJETROの視点から、タイのマクロ経済状況や日系企業とタイとの関係についての話を拝聴した。私の東南アジアに対しての漠然としていたイメージはこの話によって大きく転換し、私は二つの短期研修から交換留学までを貫く一つの疑問を持つようになった。

日系企業の海外展開は、アメリカやヨーロッパといったいわゆる先進国を中心に行われているというイメージを私は持っていた。しかし、タイはマーケットと生産拠点両方の側面から日系企業にとって非常に重要な国であるということを知り、強い衝撃を受けた。実際に日本にとってタイは6番目の貿易相手国であり、タイにとって日本は最大の貿易相手国であった。また、タイに進出している日系企業数は4000社にもものぼり、中国に次いで有力な進出先であることを学んだ。私のタイに対するイメージは大きく覆された。そしてなぜ数ある国の中でタイという国が日本、日系企業にとってそれほど重要な国なのだろうという疑問が生まれた。



JETRO バンコクオフィスでの様子

プログラムではバンコクの街中に滞在していた。滞在中、タクシーに乗る機会やバスで移動する機会が多かったためか、渋滞に巻き込まれることが多かった。そんな時に外を走る車に目をやると、見慣れたトヨタやホンダといった日系自動車メーカーの車ばかりが走っていた。私は個人的にそのことに驚いていたが、JETROでの話を聞いて納得することとなった。タイの経済を牽引しているのは自動車産業であり、同産業では日系メーカーが圧倒的な市場シェア、生産台数を誇っているというのである。私はここでもやはり同様の疑問を感じた。トヨタを筆頭に日本の自動車メーカーは世界でも有数の企業であり、グローバル化が進んでいるが、なぜその生産拠点がタイなのか。この疑問が私を大き

く動かしていくこととなる。

### 2.3 企業訪問と工場見学（ニチレイフーズ）

日系企業の訪問先の1つとして、日本の代表的な食品メーカーであるニチレイフーズのタイ工場を訪問した。工場見学というビジネスの現場を見る経験を通して、“生産拠点としてのタイ”を実際に体感することができ、JETRO で学んだ日本企業とタイの関係の強さを実感した。また、同企業の日本人社員との交流を通して、日本とは違うマネジメントシステムの重要性や海外で働くことの具体的なイメージを持つことができ、非常に有意義な機会であった。

ニチレイフーズの工場があるアユタヤ地域には工場が集まる工業団地がいくつ也存在していた。広大な土地に巨大な工場が集結している景色は日本では見たことがなかった。私はタイの生産拠点としてのスケールの大きさを目の当たりにして高揚感を覚えた。日本の厳しい安全基準を満たすため徹底的な品質・安全管理を実施している工場の内部では、多くの現地従業員が働いていた。駐在している日本人社員の話によれば、文化的背景の異なるタイ人従業員をマネジメントするために、日本とは異なる人事や業務のシステムを導入していた。具体的には、タイでは離職率が高い。転職を繰り返すことでキャリアアップすることがタイの文化として存在している。日本の伝統的な終身雇用と大きく乖離するこの状況に対応する必要があるのだ。そのためにニチレイフーズでは日本とは異なる給与体系や昇進システムを導入していた。海外でのビジネスには言語の違いはもちろん文化的背景の違いにも対応する必要性を強く感じた。グローバル化が進む世の中では異文化理解という言葉が頻繁に使われている。それまで曖昧だった異文化理解という言葉が、工場見学を通して私の中で少し具体性を増したように思えた。“日本の文化やシステムを押し付けるのではなく、異なる文化的な背景を理解し、相手がどうすれば気持ち良く、私たちが望むように動いてくれるのかを考える”ことが重要なのではないかと思った。

現地従業員との交流を通して、海外で働くイメージを持つことができたのも一つ大きな経験だった。

タイに赴任してからまだ3カ月の日本人社員の話は、中でも印象的だった。家族を日本に残してタイに一人で赴任する大変さや、海外で働くことのやりがいについて話を聞き、海外勤務への単純な憧れから、実感を伴ったイメージを持つことができた。特に私が大事だと感じたのは、海外の地で仕事をするときのバイタリティである。もちろん語学力はコ



ニチレイフーズタイ工場にて、学生と社員の交流

コミュニケーションにおいて非常に重要である。社員の中には独学でタイ語を勉強していた方もいらっしゃった。それに加えて語学力をカバーするほどの仕事に対する情熱や自己の成長に対する意欲が大切だと感じた。また、そのバイタリティを身につけるために継続した努力とそこから来る自信を持つことも必要だと感じた。

## 2.4 本プログラムを通して

本プログラムは私が東南アジア、さらにはタイに対して興味を持つきっかけとなった。重要なのは、海外で活躍したいと考えたり、留学に行こうと思うときに、こうした短期プログラムなどを通して実際に現地に足を運び現場を肌で感じることであると思う。それまでの旅行経験から、漠然とした“海外ではたらくこと”のイメージを持っていた私は、このプログラムに参加することで交換留学への決断につながる一つの大きな経験を得ることができた。また、海外での活躍を志すときに、2週間という短期間のプログラムの限界も実感した。語学力はもちろん、このプログラムで学んだ海外で働くことに必要なバイタリティや異文化理解力を養うことや、タイと日系企業の関係についての学習を進めるためには長期的な海外経験が必要だと感じたのである。しかしながら、プログラムを通して肌で感じた経験は日本に帰国した後の学習のモチベーションとなり、より専門的なプログラムである Campus ASEAN への3年生の春の参加にも大きな影響があった。

## 3. タイ・シンガポールでの Campus ASEAN プログラム

### 3.1 概要

Campus ASEAN プログラムとは名古屋大学と ASEAN の7つの大学がコンソーシアムを形成し、英語によるコースワークとフィールドワーク・インターンシップを組み合わせたカリキュラムである。その目的は ASEAN 地域と日本双方の経済・法・政治・社会・文化に対する共通理解をもった次世代国際協働リーダーを養成することである。前節で紹介したプログラムと異なる点は、Campus ASEAN プログラムは学部によって提供されるプログラムであり経済・経営の視点からより専門的なプログラムとなっている点である。前節のプログラムはタイの歴史や文化を学ぶことにも大きな割合が割かれていた。一方 Campus ASEAN では、タイおよびシンガポールで活動するより多くの日系企業の訪問に加え、政府機関の訪問、現地学生との事前学習の成果についてのプレゼンテーションと経済や経営に関する活動により焦点を当てたプログラムとなっている。2016年2月15日から27日までの13日間のプログラムであった。

Campus ASEAN プログラムでは、タイとシンガポールの日系企業を訪問する。実際に現地の企業のマネジメントの話を聞くこと、海外で働く日本人社員と会って話をするができる。そのため交換留学に向けて絶好の機会であると考え、参加を決めた。



私は2年次に参加したプログラムの後、研究テーマとして”日系自動車メーカーによるタイの生産・輸出拠点化要因”を掲げ学習を進めてきた。そして2016年1月には交換留学へ応募した。交換留学の目的は、タイのビジネスモデルの学習を通して”日系企業とタイの関係”の理解を深めることである。また応募の過程で、将来はASEAN地域で活躍する日本企業で働きたいと思うようになった。

### 3.2 学生プレゼンテーション

Campus ASEAN プログラムでは2日目に、タイ・チュラロンコン大学で日本とタイ両国の学生2グループずつが、事前に学習した成果をプレゼンテーションで発表した。私のグループは企業の社会性についてのケーススタディーを発表した。もう一方のグループはタイの離職率に着目し、トレーニングシステムについてのプレゼンテーションを行った。チュラロンコン大学の学生は南アフリカの原材料の貿易とその経済発展への効果、日本とタイの株式市場の指標分析という2つのプレゼンテーションを行った。そこで私は、アウトプットの大切さとグループで1つの目標へむかうことの難しさを痛感した。

私たちはプログラムの派遣前日まで事前学習を続け、タイへ到着した夜もプレゼンテーションの作成に明け暮れていた。プレゼンテーションを通して伝えたいことは何か、私たちが面白いと思っていることは何かを明確に示すことは想像以上に難しいことであると感じた。さらに発表の際は英語で伝えなければならず、英語力がまだまだ心もとない私はとても苦労した。結果として、私のグループのプレゼンテーションは上出来とは言いがたいものであった。内容がまとまっておらず、共有したいポイントを明確にできないプレゼンテーションであったと感じた。言語が英語ということも加わり、非常に悔しいプレゼンテーションとなったが、多くのことを学ぶプレゼンテーションでもあった。

第一に、アウトプットの重要性を認識したことだ。私たちは伝えたいことを意識し過ぎてしまい、過剰な情報をインプットしてしまった。今ある情報・材料をどのように使い、さらには削ることによって簡単に伝えるかという“魅せる・伝える”という視点が欠落していたと感じた。日本の大学の講義では基本的に教授の話“聴く”インプットの形がほとんどである。学んだことを、プレゼンテーションを通して“伝える”アウトプットの練習が不足していたと強く感じた。さらなる英語の鍛錬が必要だという認識も得られた。

第二に、グループワークの難しさを感じた。聴衆に伝える以前に、グループの中で伝えたいことのビジョンを共有していなければならない。私たちのグループには3人の日本人の他にインド出身のメンバーがいた。ディスカッションは英語で行なってきたが、ビジョンを4人で正確に把握することができなかった。このビジョンが共有できていないことが結果としてプレゼンテーション全体の曖昧さにつながってしまったのだと思う。

チュラロンコン大学のほとんどの講義で成果を評価する指標として、グループプレゼンテーション

が課されている。授業で学んだことを生かし、グループで1つの結論を導いてそれを発表することは、アウトプットとグループワークの両方の訓練になるだろう。交換留学でどのような成長を目指すべきなのか、いくつかの要素を発見することができた経験だった。

一方で、チュラロンコン大学の学生によるプレゼンテーションは、非常に理路整然としていた。内容が磨かれており、シンプルであったと感じる。焦点が明確で、定義づけや数式の説明がしっかりとなされていた。話の進め方や、目線、プレゼンテーション中の余裕など、アウトプットの練習量が伝わってくるプレゼンテーションだったと感じた。交換留学で彼らとともに勉強することは私にとってプレッシャーとなるのではないかと不安に感じたが、一方で彼らから多くを学ばなければという使命感のようなものも私の中に芽生えた。



学生プレゼンテーションを通して交流を深めた名古屋大学とチュラロンコン大学のメンバーたち

### 3.3 企業訪問 (Panasonic Asia Pacific Pte. Ltd.)

Campus ASEAN プログラムではタイ、シンガポールの2カ国での滞在中に、日系企業を5社、タイの政府機関を2つ訪問した。中でも最も印象的であったパナソニックの現地法人である Panasonic Asia Pacific Pte. Ltd. (以下パナソニックシンガポール) の訪問について触れたいと思う。特に学生と社員の間で行われた質疑応答の時間は、私たちが普段勉強する経済・経営学と実際のビジネスの関連あるいは乖離を学ぶことができた貴重な時間であった。

パナソニックシンガポールの社員との質疑応答の時間では、日本およびシンガポールの学生が事前学習で疑問に感じたことに社員が実務的な視点から答えるという形式であった。私たちのグループは前述の通り企業の社会性についての学習を行ってきた。そのため、私はパナソニックシンガポールが企業の社会的責任(CSR)としてどのような活動をどのような目的を持って行っているのかを質問した。パナソニックシンガポールは主に環境と教育という二つに特化したCSRの活動を行っているという内容であった。興味深いのは、CSRはたしかに企業の重要な要素として存在しているが、企業の目的はあくまで存続のために利益を出すことであることを強調していた点である。私たちはそれまでの学習で、CSRの重要性は近年高まっていることから、パナソニックのような大企業はCSR活動を過去と比べてより積極的に行っているだろうという考えを持っていた。しかし、彼らはあくまで利益を出す事業が主であり、近年、CSRの活動を過去と比べて拡大したり、CSRに対する姿勢を強化したということではなかった、というのである。私はこの回答を聞いていささか衝撃を感じた。同時に学問としての経

経済・経営と、実務としてのビジネスの間には少なからず差異があるのだということを感じた。理論や知識を学ぶことと、それを実践するのでは考え方が大きく異なる。他の企業訪問でもそれを感じたが、パナソニックシンガポールの訪問で改めてこのことを強く感じた。理論や知識のインプットはもちろん重要であるが、それを実際にビジネスで使うアウトプットの際には、企業とそれを取り囲む環境を考慮する必要があるのだと思われた。経済・経営学とビジネスのギャップを強く感じた企業訪問であった。このことは私の日系自動車メーカーとタイについての研究にも当てはまるのではないかと感じる。つまり、日本で理論や知識の学習をすることはできるが、それが実際に企業の内部でどのように解釈され、利用されているのかを知ることが重要であるように思われる。そのためには、実際にタイの現地法人を訪問し、企業としての意見や考え方を調査することが重要である。この点で、タイへ交換留学することの意義を新たに見いだすことができた経験であった。



名古屋大学、シンガポール国立大学のメンバーとパナソニックシンガポールの社員のみなさん

#### 4. 2つの短期研修を経験して

本稿で紹介した、「タイにおける日系企業のグローバル展開学習」プログラムと Campus ASEAN プログラムという2つの短期研修は、どちらも私にとって非常に大きな意味のあるものであった。2年次の研修がなければ、私がタイやASEANという国・地域に興味を持ち、交換留学を志すことはなかったであろう。旅行者という視点で、東南アジアに興味を持っていた私が、このプログラムによって、より学術的な視点から東南アジアを学ぼうと思うことができた。学校のプログラムに参加することがなければ、政府系機関であるJETROの訪問を通して市場や生産拠点としてのタイの一面を知ることはなかったであろう。また、ニチレイフーズの工場見学を通して、日系企業の海外展開を肌で感じることもできた。現地法人で働く日本人社員と話すことで、海外で働くという漠然としたイメージを、少しではあるが明確に持つことができたと感じる。私の大学生活を大きく変えた人生のイベントであったと確信している。

3年次に参加した Campus ASEAN プログラムは、交換留学で私が何を目標に掲げ、どのような生活を送るべきか示してくれたプログラムであった。Campus ASEAN プログラムのメインである日系企業の訪問では、経済・経営学とビジネスの現場の乖離を感じた。大学で学ぶ学問としての経済や経営と、ビジネスの現場で重要とされる経済や経営の知識や経験は異なっていた。つまり、私が交換留学を通してチュラロンコン大学で学びたい“日系企業とタイの関係”やタイのビジネスモデルと、タイでビジネスをおこなう日系企業が実際に考えるそれらは異なる可能性がある。その差を埋めるには、交換留

学の期間に、日系企業を実際に訪問し、現場や現場の考え方を学ぶことが必要になる。これが交換留学中の1つの大きな目標であると言える。また、学生プレゼンテーションでは、アウトプット力の不足を痛感した。自分がこれまで講義で学んだ知識を伝える力を交換留学で身に付けたいと感じた。特にチュラロンコン大学では講義の評価の一環としてグループプレゼンテーションがある。この機会を生かして“わかりやすく、魅力的に伝える”能力を身に付けたい。交換留学が、専門性と社会で必要な力という2つの視点で、私のさらなる成長に繋がるために不可欠なプログラムであったと強く言い切ることができる。

## 5. 最後に

まず、これらのプログラムを提供して下さった名古屋大学や経済学部、強力なサポートをして下さった土井康裕先生、萬智恵先生に心から感謝を申し上げたい。今回のプログラムでは日本学生支援機構からの奨学金に頼らせていただく部分も非常に大きかった。東南アジアへ短期的に留学するプログラムは数多く存在する。しかし、今回私は、大学のプログラムで東南アジアへの研修に参加して非常に満足している。ひとつには、大学のプログラムだからこそ、現地の一流大学、一流企業の中に入って貴重な体験をすることができた。また、大学で提供されているプログラムでなければ、日本学生支援機構からの奨学金を利用して、非常に経済的な費用で貴重な経験をすることはできなかったであろう。この奨学金が、私が短期研修に参加する後押しをしたのは間違いない。最後に、執筆のサポートをして下さった星野晶成先生にも感謝したい。今後は私の体験を多くの後輩たちに広く伝えていけるように尽力していきたい。